30 布袋

一点

明治期（十九世紀）
陶磁　像高七二・〇

右手指で上方を差しながら宙を見上げて微笑む布袋を月見の姿と解釈する、いわゆる月見布袋像である。東洋絵画の画題では古くから「指月布袋図」としても親しまれてきた。現在では、「布袋さん」といえば極めて通俗的な置物のように思われているが、本来は「指先（経典）ではなく月（真の自己）そのものを見よ」という、禅の教えが込められた造形である。

中世以来つづいてきた備前焼は、壺や甕、擂鉢などの日常雑器のほか、茶陶のように粗い土の風合いを持つイメージが強い。対照的に江戸中期以降に作られるようになった彫塑的な細工物では、白備前と呼ばれる白い肌のやきものや、彩色をほどこした色絵備前と呼ばれるものも作られていた。細工物の伝統を受け継いだ本作でも、褐色の化粧土を表面に塗り、滑らかな仕上がりにしている。また、焼成中に指先や頭頂部、顔、肩に降りかかった灰が溶けて釉となり、黄土色の「黄胡麻」と呼ばれる変化を見せて、備前焼独特の味わいを醸し出している。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

福やござれ —寿ぎの美・新春に集う
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 42

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年一月六日発行

© 2007, The Museum of the Imperial Collections